

令和7年度 授業改善推進チーム報告

【「指導に生かす評価の在り方」に関する教員向けアンケートの実施】

5月、改善チームメンバーで今年度の活動テーマを「指導と評価の一体化について」と決めました。

7月、指導と評価の一体化に関する本校全教員向けのアンケートをGoogle Formで実施しました。その結果、観点別評価は適切なものとなっているか、評価をどのように指導に生かしているか（生かすことができているか）について、考えていく余地があることがわかりました。アンケートの結果は職員会議の際に先生方に共有し、改善するためのポイントを提示することができました。

【「指導に生かす評価の在り方」に関する教員研修を実施】

11月12日、教員研修を実施しました。研修内容は以下の3点です。この研修は『茨城新聞』にも掲載されました。

①校内取組み事例紹介

授業改善推進チームに所属する5教科1名ずつの先生方が各実践を持ち寄り、先生方と共有する時間を持ちました。質疑応答も活発に行われ、授業づくりの悩みや困り感を共有することができたり、「私もやってみよう」という声が聞かれたりしました。教科を越えて授業づくりについて話す機会がもてたことは大きな成果でした。

◎発表内容

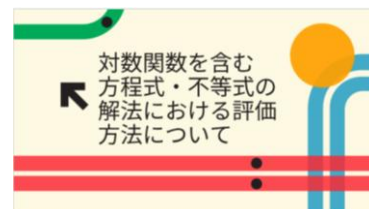
国語：「生徒の発表場面の評価の付け方について」

数学：「対数関数を含む方程式・不等式の解法における評価方法について」

英語：「授業および評価の付け方の実践例」

理科：「主体的に学習に取り組む態度の項目の評価の付け方について」

社会：「授業の理解に対する生徒の変容について」



②指導主事からの助言

本研修は、新学習指導要領下における「指導と評価の一体化」の基本的な考え方と、具体的な評価の在り方を理解することを目的としています。高校教育課の指導主事お二人を講師に迎え、以下の助言をいただきました。

まず、評価の最上位目標は「教育目標の達成」にあるという基本理念をふまえ、評価には、学習前に理解度を確認する「診断的評価」、指導中に改善を図る「形成的評価（指導に生かす評価）」、そして単元の終わりに成果を判定する「総括的評価（記録に残す評価）」の3種類があり、これらを適切に使い分けることが不可欠です。特に、評価を通じて教師が指導を改善し、生徒が自らの学びを振り返って自己調整につなげることが重要だと示されました。

次に、観点別学習状況評価については、それぞれの評価のポイントが具体例とともに示されました。

- (1) 知識・技能：個別の事実的な知識の習得に留まらず、それらを既存の知識と関連付け、生活場面等で活用できる「概念的な理解」を評価の対象とする
- (2) 思考・判断・表現：知識・技能を活用して課題を解決する「過程」を重視し、ペーパーテストだけでなく、論述、発表、グループ討論などの多様な活動を通じて見取ることが求められる
- (3) 主体的に学習に取り組む態度：目標達成に向けた「粘り強い取り組み」と、自らの学習を調整しようとする「メタ認知」の側面を見ることが重要である

そのうえで、実践の手順と留意点として、学習評価は、単元ごとに「目標設定→評価規準の作成→指導・評価計画の立案→総括」という4つのステップで進めることが推奨されました。評価の場を精選し、評価の妥当性と信頼性を確保するため、評価規準を十分説明し、共通理解を図ることが「学びのエンジン」として機能するための鍵となるとアドバイスをいただきました。

生徒が主体的に学ぶ力を育むためには、適切に評価することが不可欠です。本研修の内容も参考にしつつ、日々の授業改善と生徒の変容を促す評価の実践に努めていく必要があります。

③授業改善推進チーム企画 ワークショップ

(1) 内容

数学I（高校1年生）の問題について、生徒の解答例を5案作成し、その解答についてA,B,Cのどれで評価するか考える活動を行いました。

教科を問わず4～5人のグループを作り、各自で考える→グループで意見をまとめる→全体で討論するという流れでした。

(2) 題材を決めた理由

指導と評価の一体化にあたり、「各教科で評価、判断を手探りのままやっている」、「他教科でどのように評価しているか参考にしたい」という意見がありました。そのため、他教科の評価について見識を深めることで、自教科に生かせることがあると考えました。また、数学科としても他教科からの意見を聞くことで評価の方法について新しい知見を得られると考えました。



(3) ワークショップの様子

各先生方が活発に意見を交わしている姿が見られ、想定以上の反響をいただきました。教科ごとに論理関係の捉え方や基準に対する考え方が異なっており、自教科である私にとっても大変参考になりました。また、参加した先生方からも他教科の様子が聞けたことや、評価について話す機会が得られたことに好意的な印象を持っていただけました。

(4) 反省

時間配分が不足し、もっと議論したいという要望に応えることができませんでした。しかし、評価に対して先生たちが考える機



会としては十分なものを提供できたと考えています。今回は数学科の問題で考えましたが、他教科の問題でも同様のことをしてみたいという意見や、技能教科での評価の仕方が気になるという意見もありましたので、次回以降の参考としたいです。

【チームメンバーによる公開授業の実施&「略案」の活用】

「普段から授業公開をすることが当たり前となる雰囲気をつくりたい」という思いから、チームメンバーが先頭に立ち、公開授業を実施しました。実施に際しては「略案」のフォーマットを作成し、事前にGoogleチャットで教員全員が共有できるようにしました。また、「略案」にはQRコードを載せておき、授業を参観した感想を書き込めるようにしました。いただいた感想は授業者の先生にお伝えし、フィードバックができるようにしています。

略案（末尾に掲載）

- ① 中学理科
- ② 中学英語
- ③ 高校化学
- ④ 高校国語
- ⑤ 中学国語

【「思考力」の観点を3段階に分けて評価する規準の作成】

(1) 概要

本校では、全日制・定時制・附属中で、本年度展開している教科・科目ごとの、思考力を評価する指標を作成しました。

(2) なぜ思考力なのか

授業改善推進チームのアンケート結果から、先生方が、「知識・技能」の評価よりも、「思考・判断・表現」の評価や、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について課題を感じていることが読み取れました。まずは「思考・判断・表現の評価」から、その中でも思考力に焦点を置いて検討していくこととしました。

(3) 何のためのものか

このレベル分けは、思考力・判断力・表現力のうち、特に思考力を評価する際の指標を共有するためのもので、レベル3の記述に当たっては、国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』を参考にしました。この資料は、同研究所が「学習評価の基本的な考え方や、各教科等における評価規準の作成及び評価の実施等について解説しているほか、各教科等別に単元や題材に基づく学習評価について事例を紹介」しているものです。また、同資料から引用している「評価の観点と趣旨」は、各教科等の学習指導要領の目標の規定を踏まえ、観点別学習状況の評価の対象とするものについて整理したものです。

(4) どう使うのか

このレベル分けは、思考力を評価する際の指標として考えております。例えば、生徒が授業中に思考力を働かせている場面を評価する際の着眼点の参考として用いること考えています。教科・科目内の先生方が、生徒の思考力がどのように向上したのかを、共通の目線ではかれるように利用することを想定しています。

具体的には、例えば、

レベル1：意見が言える

レベル2：根拠をもって意見が言える

レベル3：客観的な根拠をもって意見が言える

というレベル分けの場合、「(ある生徒が)9月の授業ではレベル1だったが、11月にはレベル2となり、年度末にはレベル3に達した」のように、思考力が、設定したレベルのどの段階にあるのかを、各教科・科目の先生が共通して見ることを考えています。